

寛永諸家譜

清和源氏系七冊之四
支流

59

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186	(59)
函號	特 76	1



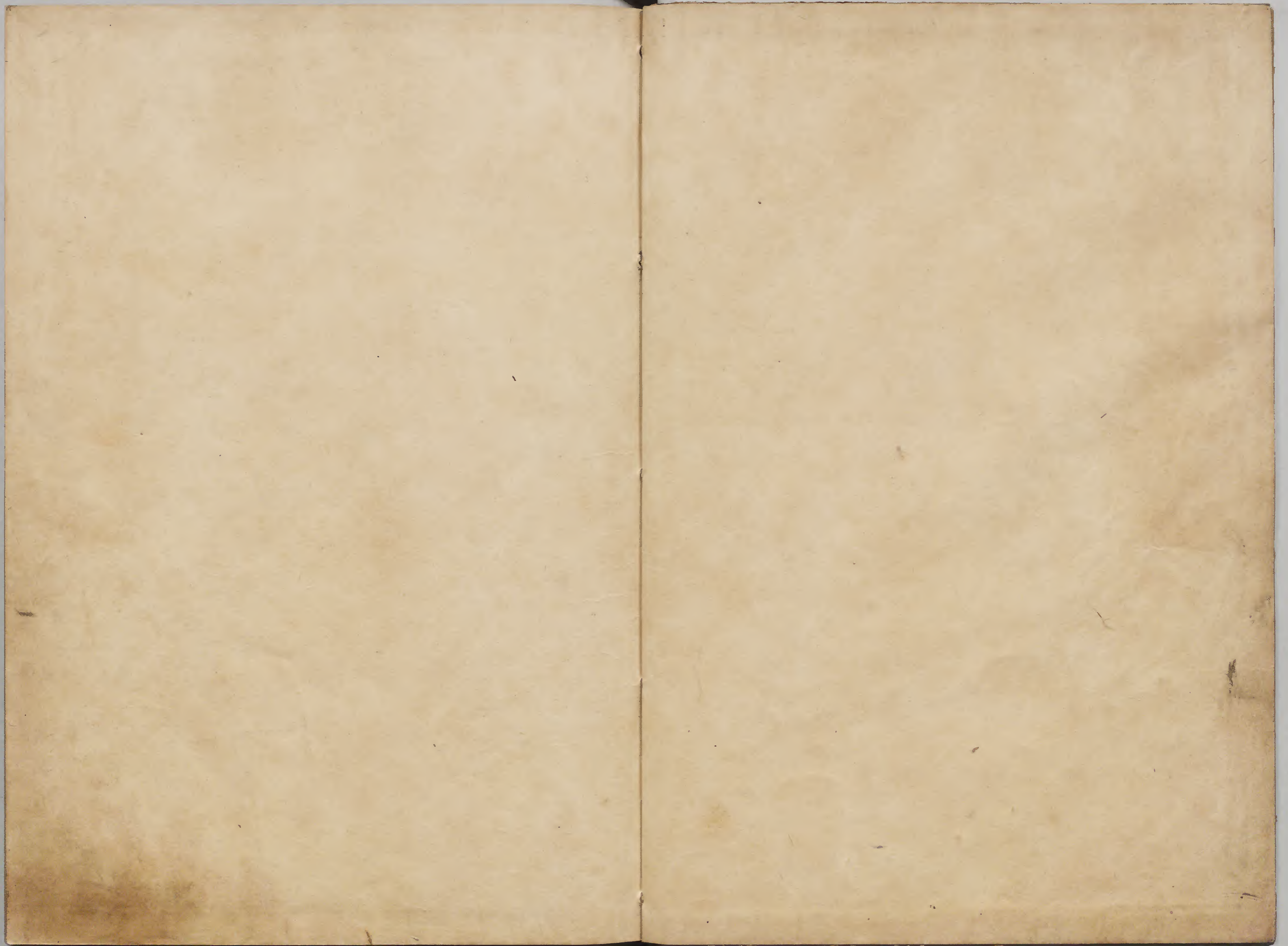
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





西尾

小坂

富士

伏屋

小長谷

喜田

矢頭

作脇

芝山

尾崎

尾園

寛永諸家系圖傳

清和源氏

癸四

支流

西尾

● 吉次

陽波守

從五位下

生國尾列

初信長へは信長他書乃ときハ

泉列塔へ

淺草文庫

東照大権現の御供ひくすにふると増ふる

三列へ供なりし其時分ふるに 御為家

より流るる事

慶長四年十月三日従五位下に叙し

同十一年八月二十六日年七十七少く

死す

忠永

主水依 従五位下 丹後守

實ハ酒井河内守重忠子なり若次養

子

長文長八年従五位下に叙し丹後守小

任じ

元和六年正月十四日年三十七卒

忠昭

右京亮 丹後守

寛永七年十二月二十九日従五位下

忠知ちか

一叙しよ

主水依

生國か武列り

家紋いえもん柳やなぎ松まつ

西尾

● 吉次

小左衛門尉 従五位下 隠岐守 生國濃列
 大指現（後久）年知所 一万二千石 存領也
 慶長十一年八月二十六日 城列 伏見小
 松乃々 病死 法名梵長

利氏

藤兵衛尉 生國同前

實ハ露見市丞利政が子なり 本國濃列 紋露乃丸

信長小治不利政死一々乃ち西尾徳

政守小郎 乃進露見とわゝめ西尾

と号

大指現一信久なる下総國千原郡乃内

少々千石乃知川と下りる

慶長五年國原泚陣一信生一

陣以後養濃國原見郡乃内藪田村上

奈良村少々九百石乃泚加増とた下り

利氏が生不一家小乃下りる乃

上意と知ふ不知川 都合千九百石也

同十六年七月十九日駿列一々病死

四十七歳 法名全勝

政氏

市無邊尉 藤之系尉 生國總列

慶長十五年七月武列江戶小おな

名徳院殿と許しなる

同十六年父利氏後府小たわく病死

りしは後府人戸あり

大権現より戸みえしは利氏が遺跡

千九百石乃内濃列九百石乃不在郷

小右衛門嫡子政氏小下三郎又下總丞乃

内千石ハ二男後三郎より下三郎

元和二年より

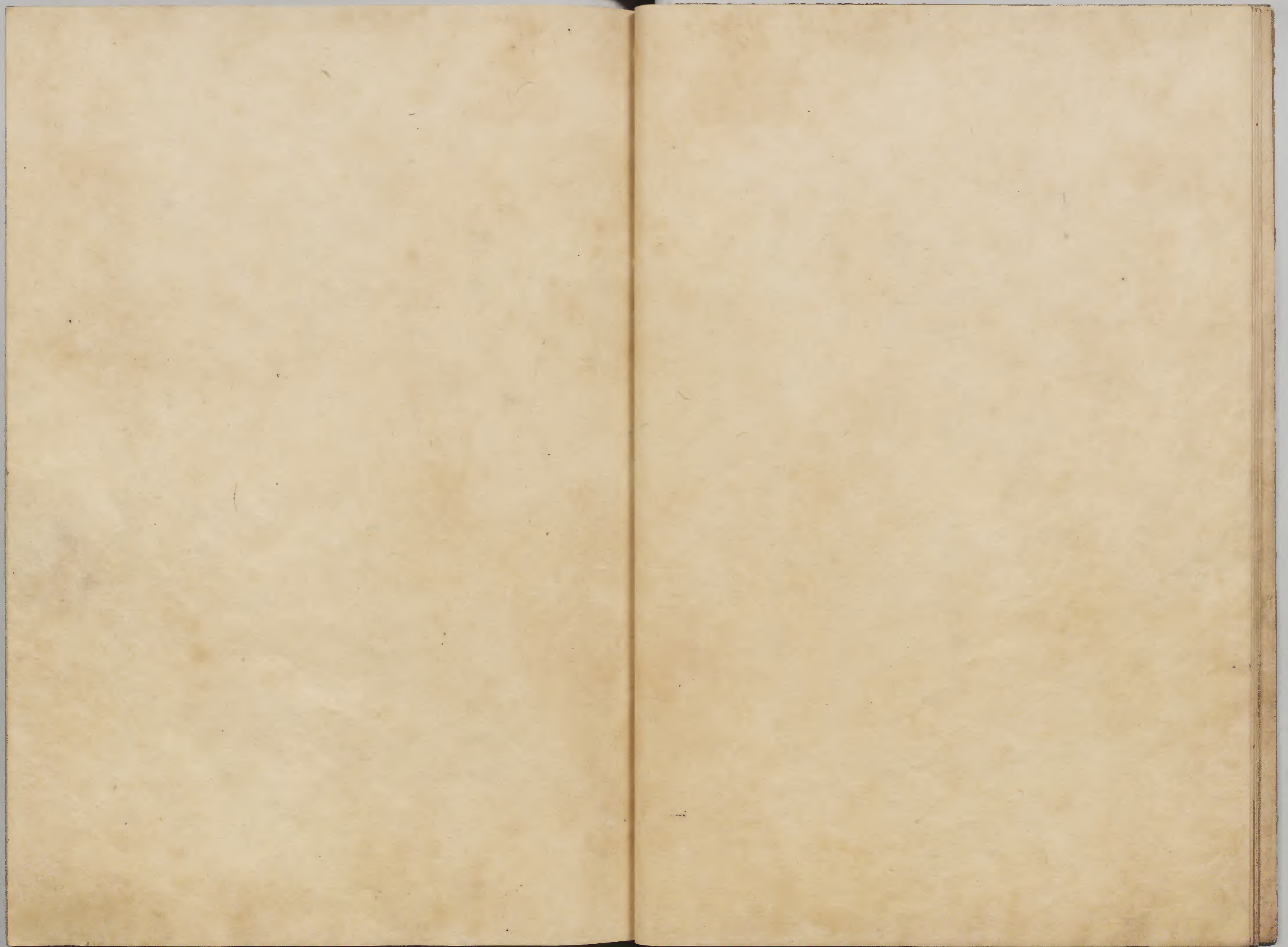
名徳院殿へりしは道主なり

將軍家へは之よりしは

寛永十年常列乃内よおなく二百石

御加増よりしは都合千百石

家紋串松 又尾花



● 吉次

隠岐守

西尾

忠永

丹後守

系呂別入是と出と

老定

因幡守

生國駿列

寛永五年八月下総守と成りて忠長が二千石

乃領地のうち七百石と成りて老定小

さげし其後老定病ありふらけり事

あり守こころより領地と返上しけり

と

と

名徳院殿是とありけり

料物とて七百石と成りて實子と成り

しりて老定長と成りて守

寛永五年八月下総守と成りて病死す

法名樂春

重長

小戸藩門尉

生國江列

名徳院殿

將軍家（佐々木）の御用儀に
小性組乃由
番とす

家紋 柳 松

某

鈴木平兵衛

生國遠列

某

三郎大史 生國同お

永禄十一年十二月

東照大権現遠列 御進致乃時三郎大史

と菅沼治郎右衛門を後石見とむかひく

軍功ありとこまじと外若三人と号す時小

大権現より御書とすりつるびく大

菅沼進致の系圖よりとす

右長

半三郎 生國同前

元和元年十月 江列こし少すく病い死し五ご十じゅう歳さい
法名ほふな淨じやう雄ゆう

表定

西尾にしお周しゅう悽せい守しゅ

西尾にしお

● 光秀みつひで

兵庫頭ひょうごづかみ

生國次列なまくにじり

濃列のうり

曾根城そねのしろ

居い

光秀みつひで

男子おとこ

信光のぶみつと屋や

— 家督かとくとゆづゆづ

信光

出雲 住不同 佐光 実八丹波国比 住人
叔升 越后守 藤原光 長が子 あり
光秀 づ 介 孫 なる

光教

豊後守 住不同 前
秋後山城守 小属 せ 小 清升 長政

朝倉義景 といふこと あり せ 八千余 乃 其
もの と ひき あり 氏家 卜 全 乃 居 城 濃 列
大垣 乃 城 とも あり んと とも ぞ 赤坂 小
い とき 時 小 卜 全 大垣 乃 色 色 八幡 まで
出張 とも 光教 十八 業 なる とい へ とも 家
来 小 武勇 乃 かも 建 あり あり の あり こと 建
あり あり 卜 全 卜 知 あり 信 とも 光教 則 光 守
こと あり 又 敵 乃 光 陣 稲 系 建 殿 右 衛 門
攻 地 の 案 内 者 あり あり あり あり あり あり あり

とうむ光教鑑と前く燈殿右邊つと
しつひは内小共首とする又次小一騎
のよきしつところふ光教が中右邊門
もむじくきつしその首と得るりこの
時敵勝利し得光教ふつと叫ぶる
そのまひきとする時り大將ト全ち
感状とぎげくそのち織田信長乃令
小つりト全が妹と娶致
信長濃列小出張乃と光教いさし

むぐた日られもさあるとして終をえ
ふまひく二と感で遠山采毛とい馬
とつりられち殺度軍功とぬまんづ致
ゆ唐繪蒔子乃掛物とすまふ光教後存
小あわく死するともさ言しと後ひゆ
とな多上野分をみる

東照大権現

光教とめ秀名小流と一時あり

大権現

名徳院殿よりくつ下げかき、沖意あつこ

乃火り

与沖取様伏見藤森光教が宅より入御

たまふ

大権現會津沖陣乃時光教沖供いさんと

おしりく大坂よりいりきよあへりつと支度

と家こころり大若刑部女捕とくくり

書外まきくまきり平塚因幡とく

我りしげく家ハ光教つきら東國り

おしりくことかきこいふ光教志く乃

お答よとあつす無とも解くそのお小

小山乃沖陣りい家時光教刑部女捕こ

まといりく光教が領地曾根乃を急と

やまこころり時光教が妻子女大坂小ありと

治部女捕こまきとさぐりしりことまそふ

とあちりこまき依く即おともひれり

妻子と京都小かくしと進信信尹と

およわ光教小取あしひあるはくしり

妻子とあつてつたまふこの山小なる
龍とふねる石田治部少輔逆心して
か

大権現とて小山より江戸へかへりたまふ
時小光教先手乃諸將と清洲小川を
評議ありてまげ後阜乃城とせむべし
とてまふら福嶋左衛門右衛門とせむべし
光教の地乃案内者とてまふら先陣
小むふ池田三右衛門八段龍寺口とせめ

福嶋と光教ハ萩原川とて川くた丸と
せむ
後阜落城乃ち

大権現勝山より清津とてまふ人教ハ
赤坂小津と小野日向守とび小光教
与人 命とつてまふら清津おしへた
り小曾根乃ち出小とて垣乃本戸と
いふところあつて日とて鉄炮と放ちいふと
し

九月十日石田三成大垣とくろ國原へ
出陣とくろのあつ六福原右馬助をくろ
留ませしむこまに流わす 釣合あつて水
野日向守と光教とかの城小むふ翌日
十日右馬助大垣とくろ日守と
光教と波城へせめせしむ河口とま破る
とくろ敵乃流ハとの城中へおげ入しと逃
けあましうらしむると言橋右近秋月長門
守相良右馬助三乃九りこまの火籠と

こまの味方小戸いんこ我こまいん

あ人

大権現小しなるそ我命とををけを降人
とるり三乃九とくろがきな九りいん人
質とくろあまの志くこまハ一戦とけく
死せんといふとふらあ人こまとゆるる
光教をくろ戦功あること

大権現感どおげしりしり一石乃加増と
くろつるこまく三乃石と願ど又後府小

おわく鷹野乃地と下さ家

大坂沙陣乃時光教嘉教松平下総と小

くう道明寺急小おわく郎従と首

級と侍とと

光教男子二連る事小よりて外孫三人小

家督とゆふ

元和二年霜月十九日卒と七十三歳

散次

信濃守

慶長十三年五月六日死と二十一歳

嘉教

出雲守 家督と降いで二万五千石と知

行と男子ふき小よりと断絶と

元和九年四月二日死と三十四歳

氏教

花鳥の形を写し入るに
花鳥の形を写し入るに
花鳥の形を写し入るに
花鳥の形を写し入るに
花鳥の形を写し入るに

自來 十五歳乃と事、よりの院人うと

江戸小こ運あつて光教知行乃らち五千石

と願知と

大坂津陣乃時、山伯蕃とふくく軍事

と法と心

寛永十年六月十七日死と四十二歳

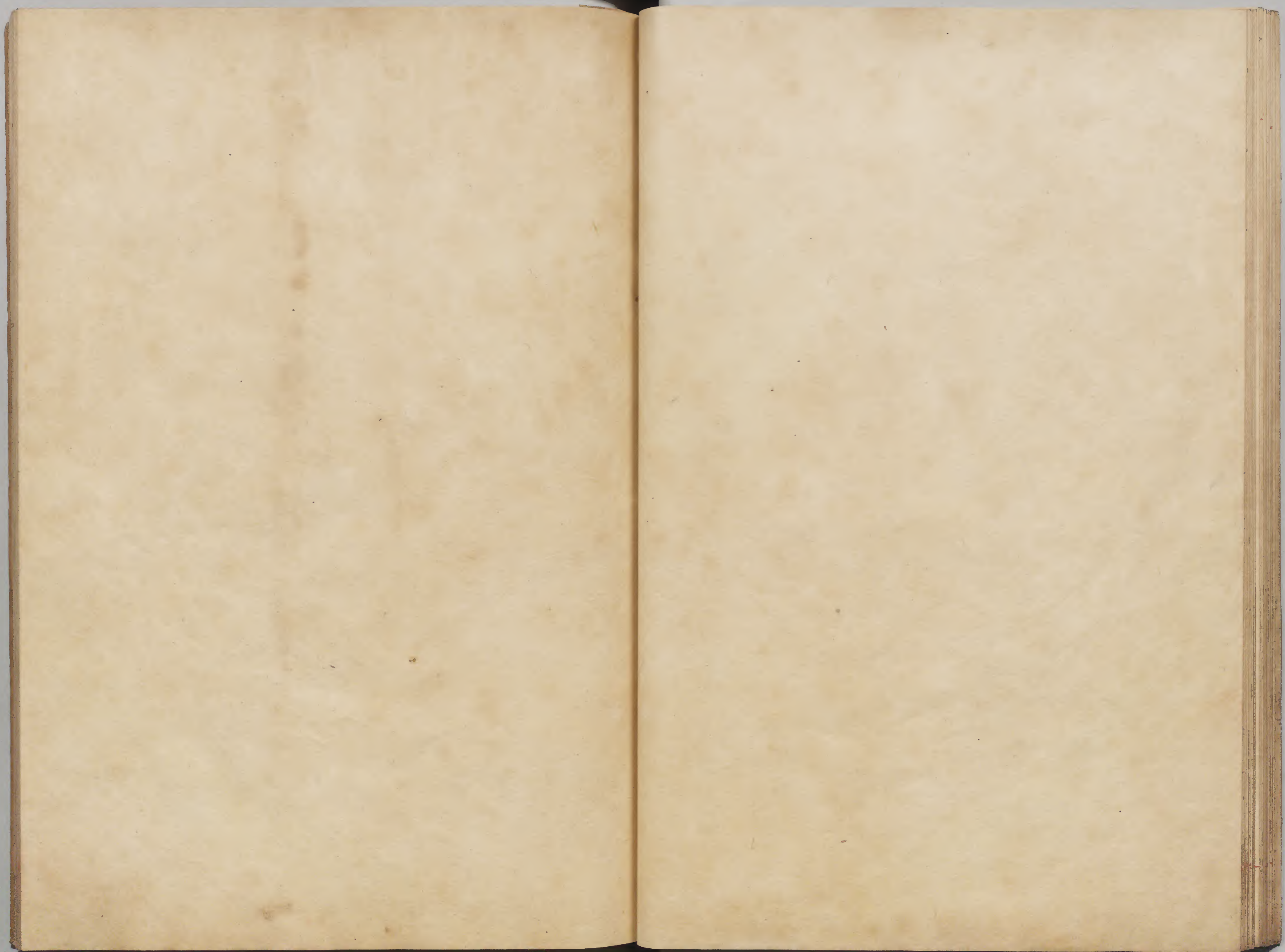
盛教

指助 母八織田三喜女 元和七年小生家

知川乃負教、よりのと 氏教死去のち

治目 作付と家

家致 松系



小坂とさか

● 政表まつへ

喜九郎きくろ

生國尾列なまくにお

織田伯後守おだのうしろ

属ぞく

主後信長のちのぶなが

天正三年十月七日てんしゅう三年十月七日尾列お中ちゆう病死びやうし法名ほふな

淨順じゆんじゆん

雄吉

孫九郎

生國同前

織田信雄

尾列乃ららるるがこいふ人信雄乃下知小

より加勢よりむむさく高名あるゆへ

信雄乃雄乃字とゆるさふ又勢列乃子

陣乃とき信雄より九頭乃のしつハ

さ家より一々乃のしつハ

高藤陣乃とき九列名護屋少く文祿

二年七月十四日小病死時小四十二歳

法名善仲

雄長

助六郎

孫九郎

生國同前

織田信雄より細女乃ときよりなまことと

いふも親雄吉小秀吉はのしつハ

小つ子雄長も秀吉へしつハ

乃より富田左近より命せらるるをせむ
きを常吉へ申して雄長ハ秀吉へつと
之後秀頼小房より大坂小あま
高兼陣乃時かご屋まで殺向と
関原沖陣乃とき雄長領地出陣小こま
ある教知りし所へ移りし所なり

東照大権現沖出馬より一ときて夜ハ
帰らば津野左衛門尉森劫印中林大學
安斎若十郎生約因幡なご一味にて

先手福鶴左衛門右衛門宇森多家中表
そのと能とあせ雄長はきよふとゆふ
小因幡け付是ととふ敵雄長を
ハ捨し其因幡にはきあひ終り因幡小
うらとて家雄長よとせしゆ人漸くお
きあが家所より又宇森多が家長立氏
能とり合のさりさたりと物とさ
雄長小あまより小おきあせ能あま皮
そのとはきよとさるる名ありて坂草城

長子 為國 階 未 修 一 年 一 月 一 日 長 子 為 國 階 未 修 一 年 一 月 一 日 長 子 為 國 階 未 修 一 年 一 月 一 日

せうれこき町口乃門の内より白志ふい乃
さう物なく壁より小えゆるゆへ生駒因懐
こゝ人馬と系捨く門より乃塀につま
一藪系入とんく皮白志ふい乃若く城
内へ引と系捨より熱勢なりとせ門塀は
厚ぶと一層小系込もく六七曲へせめあ
るも片時より城と系とる町口此門一藪
乃先びけとらといへども馬と系捨てかち
ぶらた成ゆへ城中へ八通系と七曲少く

詰現くがまし一時も人ハあそむし因懐と又
者ハ今より尾列義直ハ小あつ園原合戦後
雄長ハ秀頼小居と若浪乃知り不右此
津乃刻かり田にあし一車とまきうめりて

大指現より井伊兵部少将直政うけりる

糧米降領とく

薩摩守忠吉自尾列へ入部乃とき
尾列乃案内なるもの御用れり
小く秀頼ハ作越さき口五人指こさ

新々として、雄長と其人、救乃内ふくは
く忠者、主に依りて忠者、主卒去乃後
浪人となりて、福鶴、右衛門左衛門、出入
と、その後、方く流浪し、てこせある、亦、山口
修理と雄長と親昵、乃子細ある、酒井
雅樂、頭忠也、と修理をたのんで、言上
寛永十年六月二十八日小

將軍家へ石出さへ

同十三年八月二十九日六十一歳歿す

法名宗最

雄忠

助六郎 生國同お

寛永十一年酒井雅樂頭忠也に依りて

將軍家へ、出らば、雄長が跡職を承

領と

家紋いゝえもん
七星しちせう
槍やぶ
扇あふぎ

富士

● 信忠

兵部

生國駿列

今川義元いながわよした小原こはら——富士郡ふじぐん乃のららと

領りやうと

永祿えいりく年中なかつ小死こしとと時とき小こ五ご十七じち策さく

信重ふしげ

市兵衛

生國なまくに同どうお

天正十二年

小牧陣こまきじん乃なりとき大久保相模おおくぼさもうと

忠隣ちゆだん本もと多た作さく渡わたちち正信まさのぶとと養者やしやうととし

東照大権現とうしょうだいこんげんとと孫まごし

吉原きちげん乃なり小こおおわわくく糸地いとぢととりりりりとと

乃なりらら園東えんとう御入ごにり國くに乃なりとときき信のぶ奉ほうとと今いま小こ

し

將軍家しやうぐんけより信久のぶひさと

信久のぶひさ

市右衛門

生國なまくに武列ぶれつ江戸えど

元和二年

名流院殿なりゅういんとと孫まごし

寛永かんえい十六年十月じゅうごつ死しむむ時とき小こ四よ十二じふに歳さい

信吉のぶきち

七郎右衛門

生國同お

寛永九年

將軍家を祿

信成

布衣

生國同お

信直

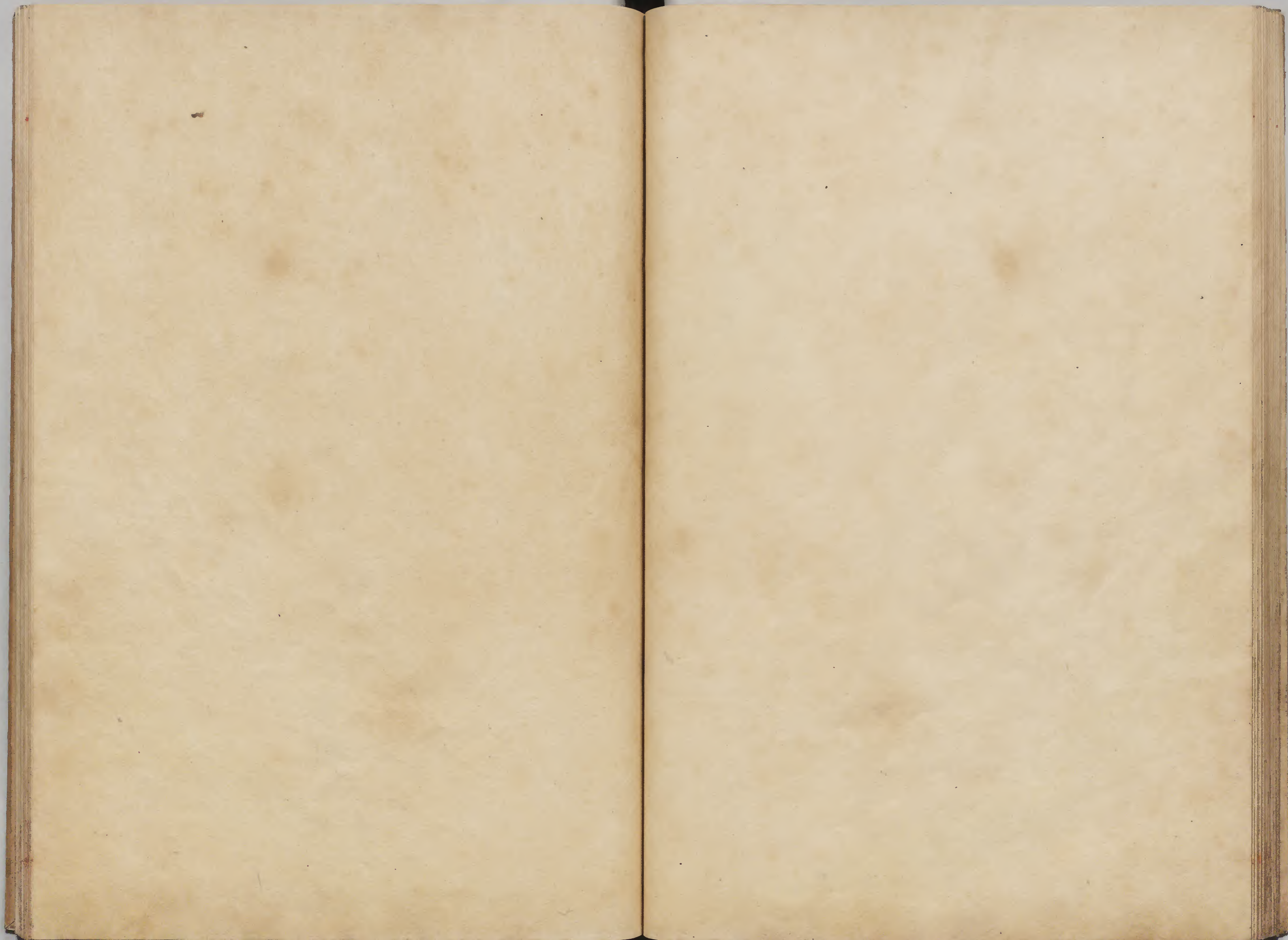
傳右衛門

生國同お

十九歳

將軍家と祿

家紋 櫻桐系



伏屋

● 為後

駿河守 法名清庵 生國養濃
織田信長 小治子

為長

右濤つ派

生國同前

秀吉小治之々々普請を以て相つて心園
原清陣以後

大権現（一）出た進出普請奉行と
らふ

慶長九年十月病死
法名春情

為次

新助 生國山城

慶長十四年為次十八歳より村越

助頭次

大権現と縁

名徳院殿へはくはる松平越中守組より

清書院書と相つて心其後永升位流

組小房といふと病ありて

と川とめす

為房

小長清尉

寛永十六年くわんえい じゅうろくにん

將軍家と係へいなる時小十日せうじつ 家

家紋いへもん 三刺串さんさしぐし 園子おんこ

小長谷

道友

長門守

生國後河

今川氏真小治之氏真没落乃後武田

信玄よりつとく本願と知りて其後教

乃忠節ありし信玄より加増乃

地よりまゝに禮文教通に建ありて其後

東照大権現とんげん後列ごりゅう所入しよにゅう國くに乃のとよみり

ま〜〜
ま〜〜
ま〜〜

天正十九年てんしやう病死びやうじ六十二歳むそふに法名ほふな常宗じやうしゆ

時重ときしげ

弥右衛門やゑもん 生國なまくに同前どうぜん

大権現おほごんげん後列ごりゅう所入しよにゅう國くに乃のとよみり

小田原おだわら名護屋なごや乃の所陣しよぢん小徳ことく牛うし真田まんだ正ただ

陣ぢん乃のとよみり

台徳院たいとくゐん殿でん小寺こてら乃のとよみり

約やく命のみこと乃のとよみり

大坂おさか乃のとよみり

其後そのち

將軍家しやうぐんや乃のとよみり

寛永くわんゑい十年じゆんねん死去しよき歳さい七十六しちじゅうろく法名ほふな窓まど殿でん

時友ときとも

市無いちむ

生國なまくに同前どうぜん

大権現おほごんげん強列つよりゅう河入かわいり必かならず乃すなはちと云いふ孫まご瑞みづきと

小田原おだわら名護屋なごや乃すなはち河陣かわじん小供こくわ奉ほう

真田まんだ河陣かわじん乃すなはちと云いふ

名徳院なとくゐん殿どの乃すなはち河かわと小列こりゅう一ひと乃すなはち河かわ大おほと

と云いふと云いふ

慶長十七年けicho 17nen死去しよき五十二ごじふに歳さい法名ほふな体法たいぽう

時元ときもと

曰郎いっちやう古鷹門ふるたかかど

生國なまくに同どうお

慶長けicho九年くわんねん乃すなはち出いと云いふと云いふ

大権現おほごんげんと孫まごと其後そのちのち

名徳院なとくゐん殿どの

將軍家しやうぐんけ河かわ之の人ひとと云いふと云いふ

政平せいへい

伊予いよ河かわ 生國なまくに同どうお

寛永かんえい三年さんねん

將軍家しやうぐんけと孫まごと

正栄

上無濤

慶長元年

大権現と稱し〜

名徳院殿

將軍家小治久〜大治毒とつ〜

案少く死云

生國同前

正次

伊右衛門

元和九年

名徳院殿と稱し〜

將軍家〜家督と弟正則小治

寛永十四年病死案三十

生國同前

正則

傳十郎

生國同お

實ハ正業まことの子小こ正次まことが弟あになり正次まこと

正ただ一ひと子ことす

寛永九年

將軍家しやうぐんとと正ただ一ひと子ことす

ををししりりととす

時次ときつぎ

加兵濤

生國同お

慶長九年

台たい徳とく院いん殿でんとと正ただ一ひと子ことす

大だい津つ妻つま乃の組ぐみ小こ入いり

同十九年大板おほいたか津つ陣ぢん小こ終はらな

寛永四年病死年四十二

法名ほふな常じやう清せい

時連ときづら

七郎兵濤

生國武藏

慶長九年

名徳院殿と縁ゆかりししくくすするる

同十二年大沙おほさ菴あま乃の組ぐみしし家いへ

同十九年大坂おほさか御ご陣じん乃のとと手て伏ふ見み此こゝ

菴あま乃の組ぐみしし

寛永十一年二条にじょう御ご城じやう出で菴あま乃のとと手て伏ふ見み此こゝ

年四十四

時勝ときかつ

七之助

實じつハハ大おほ忌よみ次つぎ郎らう兵へい清せい直ちく政せい乃の子こ時とき連れん

と内うち縁ゆかりあるあるゆゆへへりり家か督とく乃の組ぐみしし

寛永十四年松平伊賀守えがき言こと上かみにによよりり

時とき連れん乃のとと手て伏ふ見み此こゝ

同十六年大坂おほさか御ご陣じん乃のとと手て伏ふ見み此こゝ

重次しげつぎ

九郎左衛門

生なま國くに同どう前まへ

慶きやう長ちやう十じゆ六ろく年ねん

名徳院殿と流と——

元和元年 詢まこと命まこと小こよりと大津おほつ敷しきと川

と

時とき尚しやう

伊左衛門

寛永九年八月十九日

將軍家と流と——

與よ滿まん

与左衛門

寛永九年八月十九日

將軍家と流と——

時とき之し

次郎右衛門

生國なまくに茂むらた孫まご

元和四年

名徳院殿と流と——

寛永二年

將軍家より後へくまのりくく大沙麦と

後と心

家紋上藤丸

いへんきん のがし ふがのまろ

● 政保

大^{オホ}選^セ三^ミ郎^{ロウ}大^{オホ}史^シ

生^{ナマ}國^{クニ}三^ミ河^カ

廣^{ヒロ}忠^{チカ}鄉^{サト}乃^ノ清^{キヨ}時^{トキ}

大^{オホ}禮^{レイ}現^{ゲン}乃^ノ清^{キヨ}時^{トキ}と云^{イハレ}ま^マく^ク信^シ之^ノ云^{イハレ}乃^ノ清^{キヨ}時^{トキ}

慶^{ケイ}長^{チヤウ}十^{ジュウ}九^ク年^{ネン}七^{シチ}月^{ゲツ}病^{ヤマト}死^シ八^{ハチ}十^{ジュウ}一^{イチ}歳^{サイ}

直政

二^ニ郎^{ロウ}兵^{ヘイ}清^{キヨ}

生^{ナマ}國^{クニ}同^{ドウ}前^{ゼン}

名^ナ濃^{ノウ}院^{エン}殿^{テン}乃^ノ信^シ之^ノ云^{イハレ}乃^ノ清^{キヨ}時^{トキ}

大坂清陣ごんじんより供いけを

元和九年清上ごうじやう洛乃らくのとき布衣ふいとゆる

さしゆ〜

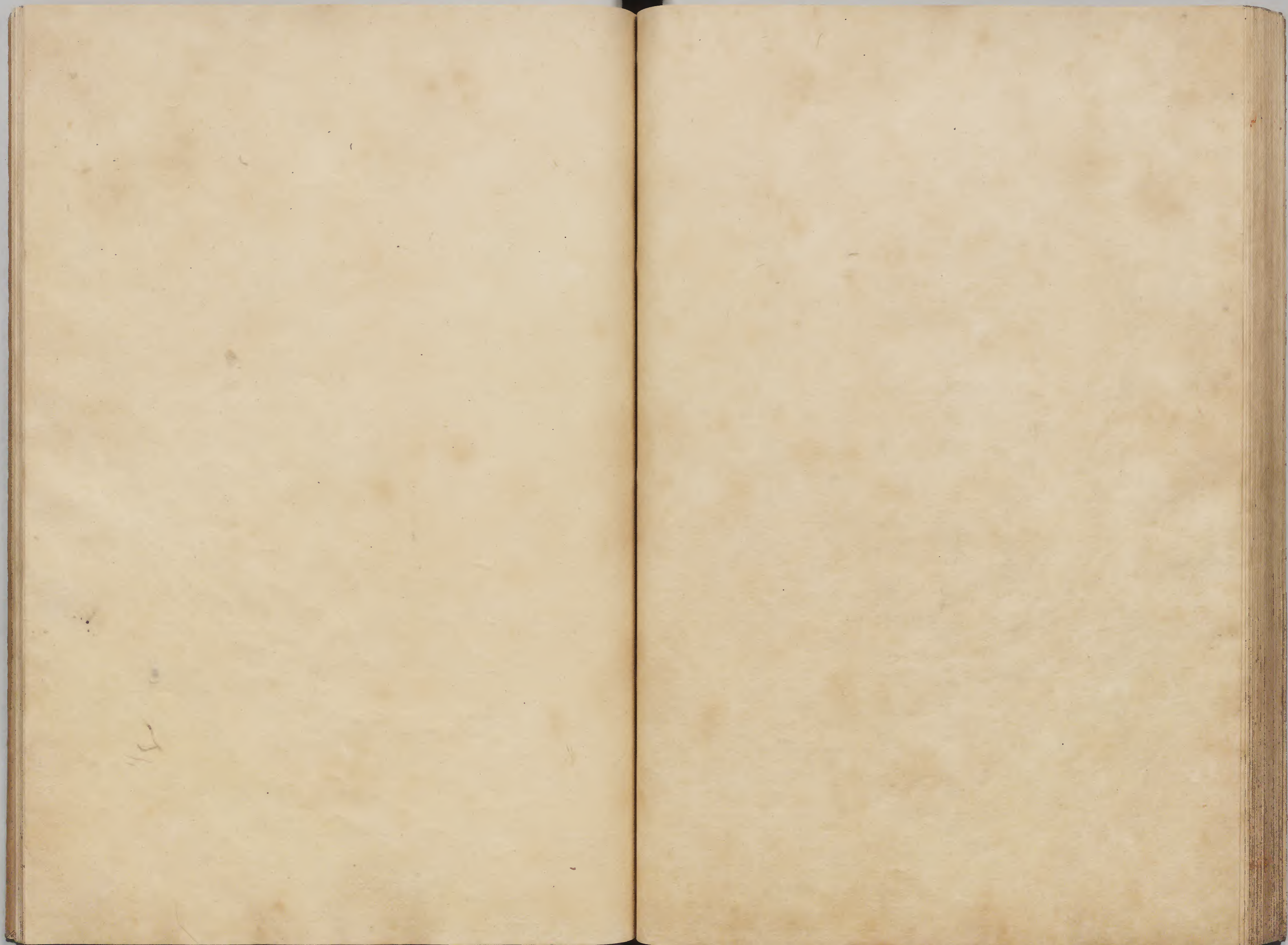
將軍家小つ〜しんどの清納戸頭しんどのとあり

寛永九年七月晦日しんじつ病死びやう五十一歳

大忍おほにん三郎大史おほしハ小長こなが七之助しちのすけ實じつ父ふ

ちらふ小こ〜ち大忍おほにん乃の系けい島しま〜ち小この

家いへ紋もん升のぼり栞しり箱はこ穂ほ穂ほ



表田うらた

● 某なにか

半兵衛はんべいゑ

生國三列いこくさんれつ

大権現へ後久なる事

某

長兵衛尉

生國同いこくどうあ

大権現

名徳院殿と拜と一と奉と

久ひさ者しや

傳つた右みぎ衛ゑ門かど尉ゐ

生國なま武ぶ列り

名徳院殿と一と奉と

久ひさ重しむ

四よ郎らう次じ郎らう

生國なま同どう前まへ

名徳院殿

將軍家と拜と一と奉と

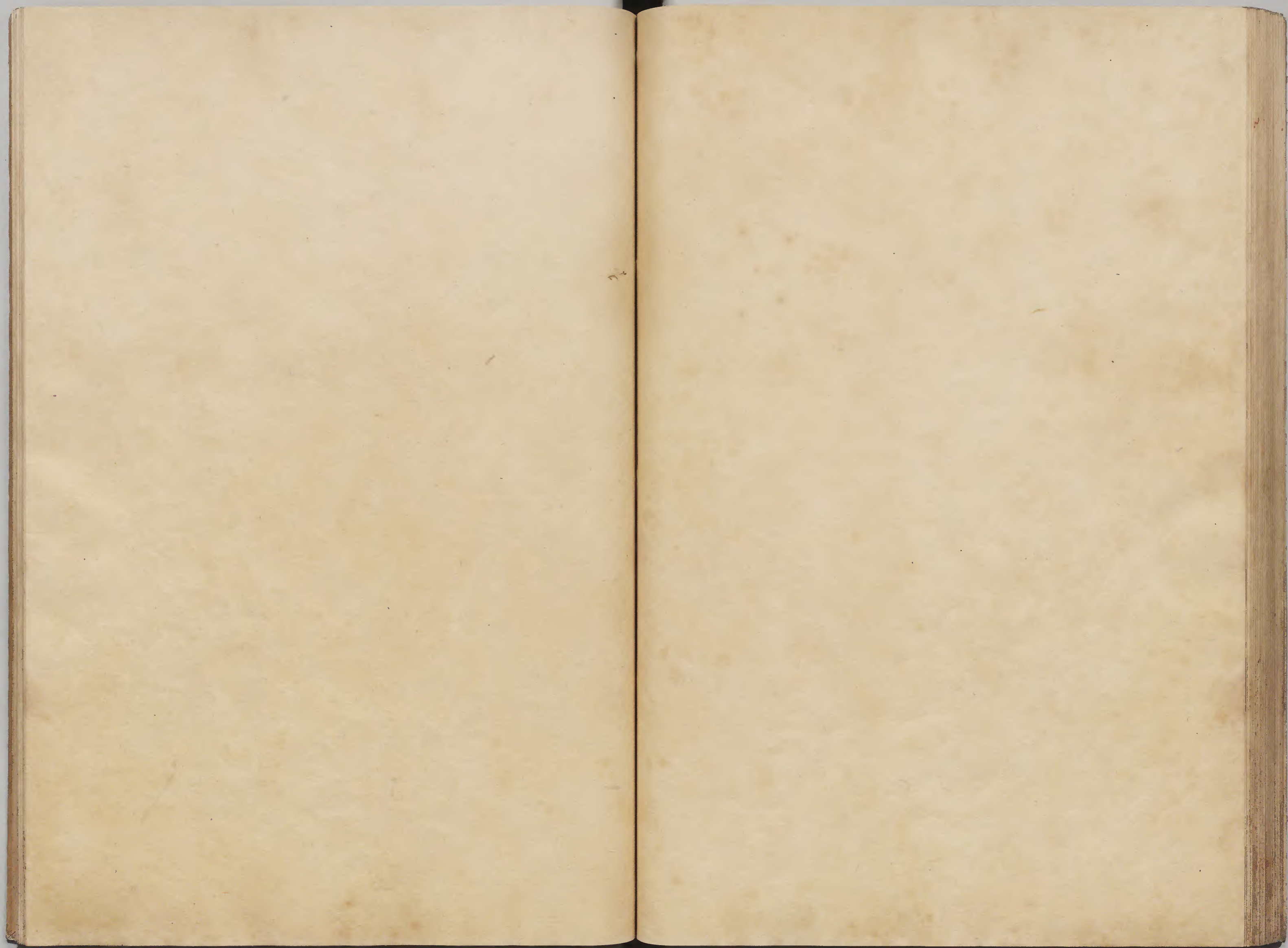
久ひさ次じ

七しち之の助すけ

生國なま同どう前まへ

將軍家と拜と一と奉と

家いへ紋もん釘かぎ如ごと奉と



春田はるた

某なにか

半無濤はんむとう

将表しょうひょう

猪之助いのすけ 後小半無濤のちのこはんむとう 之號のな 生國尾張なまくにわ
半無濤はんむとう 子こ 乳ち 實じつ 八はち 田た 掃部さうぶ

将長まさながが子こなり将長まさながハ執とら列りょう乃任のうにん人家のりえん紋もん
海うみ雲うみ貝いなり将まさ者しや

東照大権現とうしょうだいこんげん乃の任にん人にん家か紋もん

慶長けicho十年七月七十三歳しよ乃の死し也

者次しやじ

猪之助いのすけ 生國いもうくに後河ごが

大権現だいこんげん小治せうぢ人にんなり

慶長十九年六月十七歳しよ乃の死し也

丞次しやじ

猪之助いのすけ 生國いもうくに後河ごが

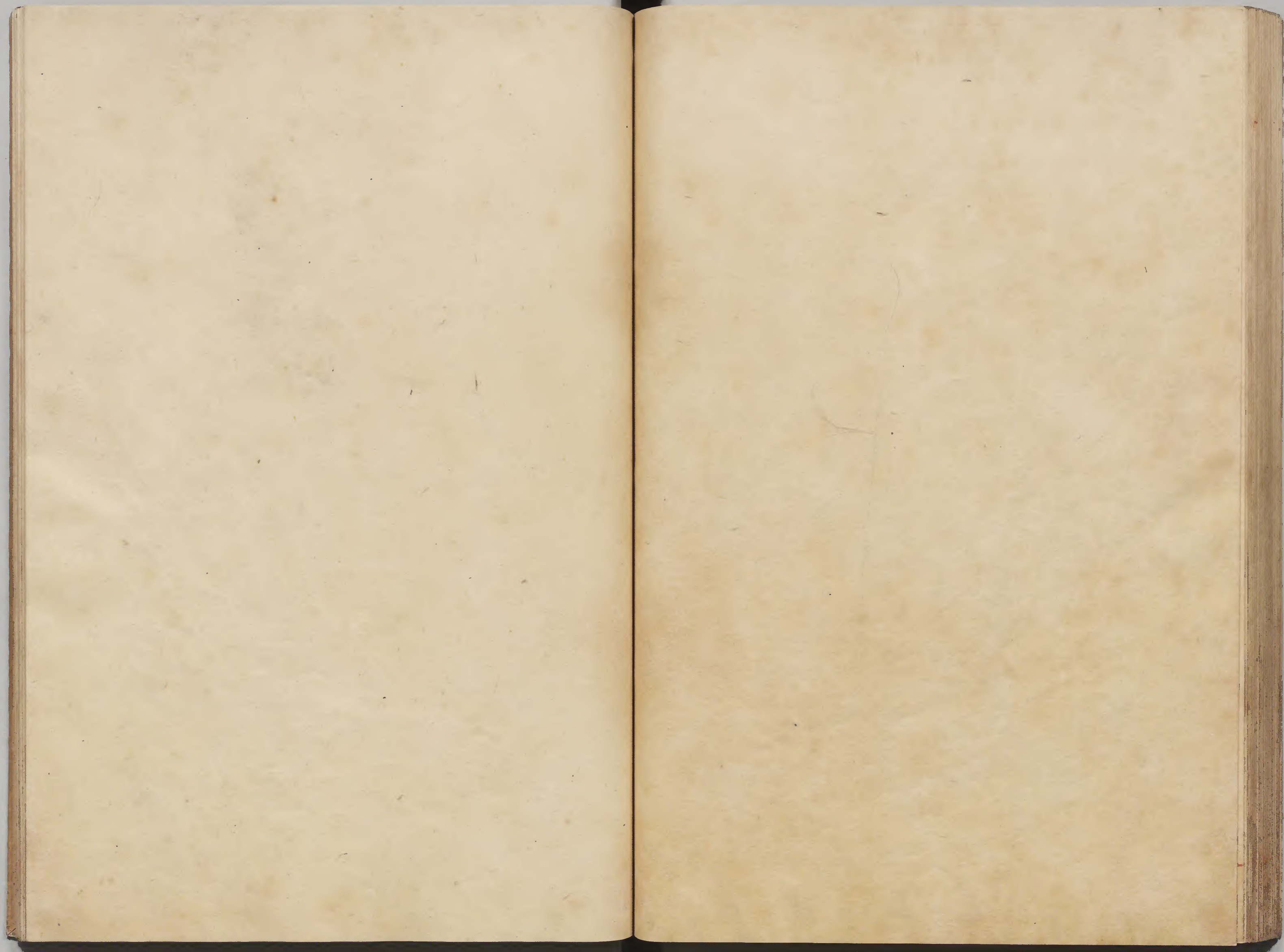
元和二年八歳しよ乃の死し也

名流なりゅう院いん殿てん乃の任にん人にん家か紋もん

水みづ乃の任にん人にん家か紋もん

將軍家しやんぐんか小治せうぢ人にんなり

家紋かもん 丸まる乃の内うち矢や筈はず



矢頭ヤテ

● 重政シゲマサ

又一部

生國三列エノクミ

東照大権現より後久を以て小田原沙陣オダワラ

供奉クフ

元和七年四月二十六日六十九歳より

病死ビョウシ 法名通清ホウネ

重次

金戸湾門

慶長十二年終り出さす

大指現りしは之なり

慶長十九年元和元年大坂^{おさか}あり

御陣^{ごじん}りし供奉

元和三年

台徳院殿りしは之なり

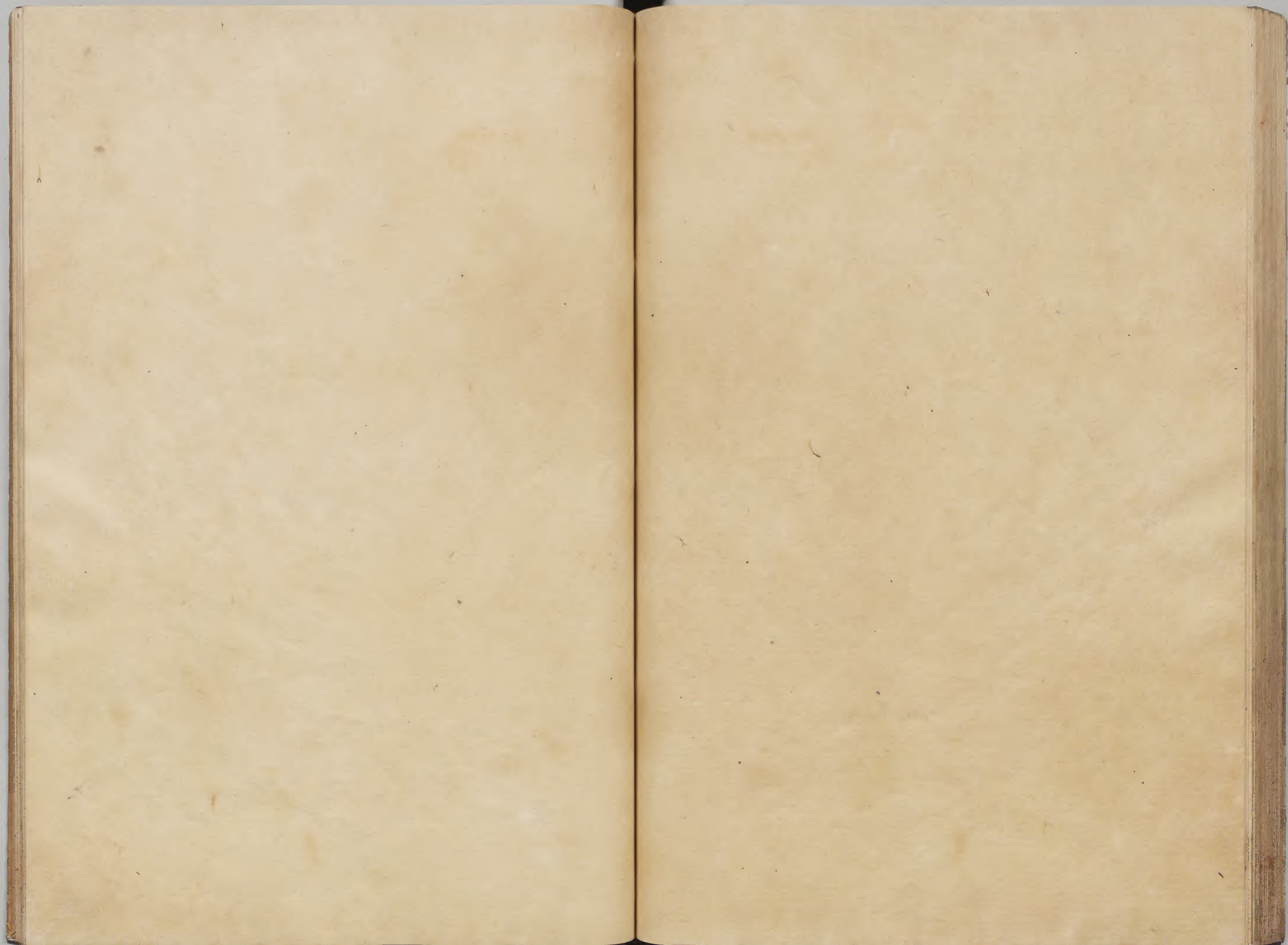
同十一年

將軍家小治之なりそ御廣敷^{ひろしき}取巻^{とまき}しつと

同十九年武列^{ぶりく}忠乃領内^{もちのうち}りしかわく

知行^{ちかひ}しつとす

家紋^{いかりん}楊邊^{やうへん}



佐脇さき

● 安連やすづな

三郎次郎

生國三河

廣忠ひろただのまらびり

東照大権現とうしょうだいこんげんより後之人ごのひとなり

安信やすのぶ

次郎大濤門 生國同家

永祿八年終り 出され

大権現小治之なるに沙合戦ありしより

供養も其後本多作清守に属す

寛永六年四月二十二日病死年八十七

法名見宗

安雅

傳大濤門 生國同家

慶長五年

名徳院殿と稱しなる

同十九年大坂陣乃時供養

翌年大坂再乱乃時伏見の御養と

法名心

元和九年 作小僧

將軍家より終り法名進清加増にて

武藏國忍乃内よおわく七百石を

領地と行ふ

寛永十三年
水書と流し

作し保く奥方乃

家紋露乃丸

芝山しやうざん

某なにか

彦十郎ひこじちろう

小岳こだけ

生國三河なまくにわ

大権現おほいけんげん

名徳院殿なとくゐん（川之守がわのみやう）

慶長十年五月二十八日けichoじゅうねんごがつにじゅうはちにち武列ぶれつよおわく

病死びやうし年八十八ねんはちじゅうはち法名ほふな向善じやうぜん

正次まさつぎ

孫作まごつく

生國なまくに同どうあ

大権現

名法院殿へ川之なる

慶長十八年武列ぶりゅう小おろくおろく五十五いそよそまで

死しとと法名ほふな淨心じゆしん

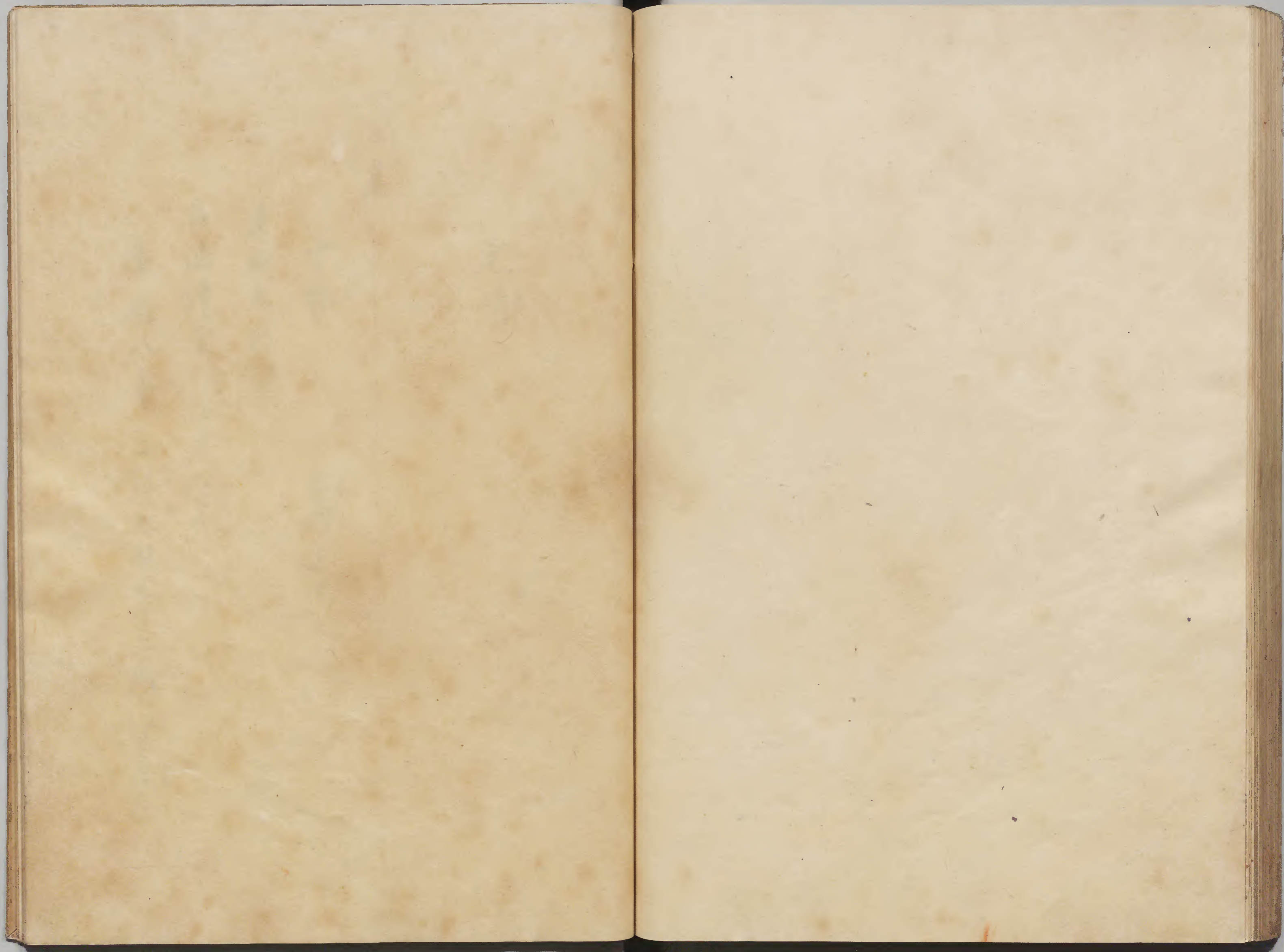
正知まさち

指右邊門尉 十七歳乃時なほときあり

名法院殿

將軍家と孫まご一ひとなる

家紋いゝのしん扇あふぎ



尾崎おしき

某なにか

中務なかづ

生國なまくに之河

東照大権現

台榭院殿たいせいでんへ

慶長八年三月廿七日七十二歳ななじふにさいに病まわ死し

成吉

勅兵衛

生國同前

大権現へ流るる

慶長八年十月九日伏見乃城に在りて

乃ち病死

正友

勅兵衛

信重

助太夫

生國三列

大権現

台徳院殿

將軍家へ流るる
寛永九年八月十五日六十歳よりて病死

信正

七之助

久重 ひさしげ

武助 ぶすけ

生國同前 いけくにさき

久重子ふさ少少正勝と少少家督と
少少

名流院殿

將軍家へ流久少少少少

寛永元年三十五歳に少死す

正勝 まさかつ

武助

生國武列 いけくにぶ

実ハ筒井七郎左衛門重三しげ子

將軍家へ流久少少少少

寛永十四年 作な少少少少

家紋 菱乃左巴 いんぎん

● 忠元 ちかもと

筒井甚六 つづむ

生國三列 いけくにさん

清康君 きよかみ 廣忠郷へ流るる
天正元年六十八歳まゝして歿す

久忠 ひさただ

筒井弥左衛門 生國同前なまくに

大権現

名徳院殿

將軍家へ川之なる

重三 しげさん

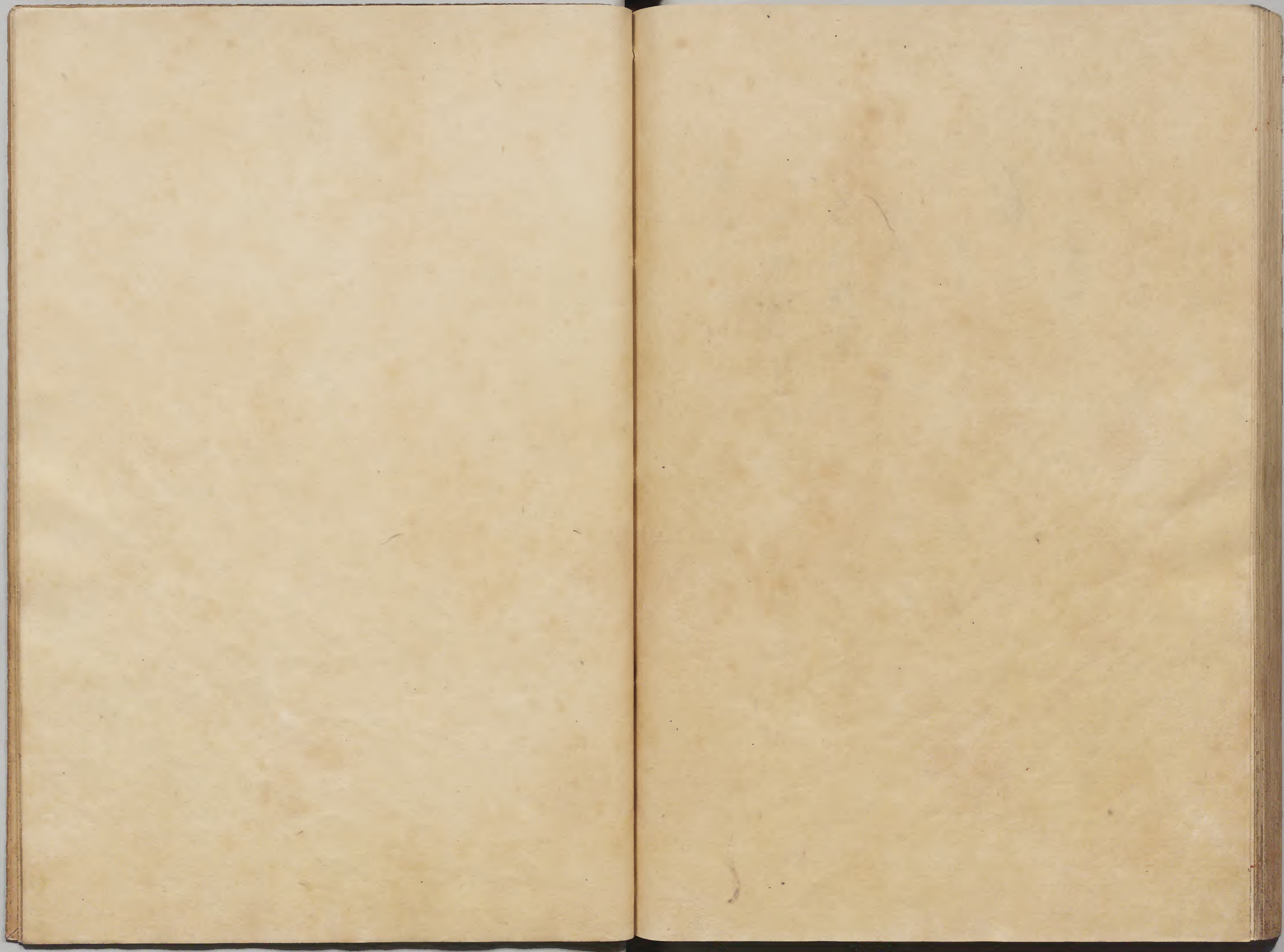
筒井七郎左衛門 生國武列たけり

名徳院殿

將軍家へ川之なる

正勝

武助



尾闈 おし

● 勝平 かちへい

孫次郎

生國尾列 いこくおしり

信長小つふ八十三歳い病死い法名い淨辰

貞平 まことへい

甚太郎

生國同お

大権現

台法院殿（川之なる

六十回歳よりて病死

法名淨雲

正平

右大史

生國江別

將軍家（川之なる

家紋 九星

